自分探しの旅

怠慢期

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
自分探しの旅

【Ｎコード】
Ｎ０１１６ＢＡ

【作者名】
怠慢期

【あらすじ】
え？　異世界？　チート？
ああ、あんまり興味ないかなぁ。なぜかって？　そりゃあ、何年も前ならいざ知らず、俺、今幸せだから。

【概要】不条理に幸せを奪われた男が、ＨＥＬＬＳＩＮＧのアーカードの身体を貰い異世界の創造主みたいなものになって世界を作り出します。作るといってもほぼ初めから放置。彼はただ、気を紛らわせるために旅がしたいだけなのです。

序章（前書き）

好き勝手やらかしてしまっているので、吐き気や怒りを感じる場合はご入場をお控えください

序章

鈴木勲（すずきいさお）。彼が仕切りという疑念のない場所で突然意識を覚醒させたことと、発光体から念力のような力で言葉を投げかけられたことは同時に発生した。

鈴木勲という人物を紹介し説明するのは簡単だ。年齢２９歳、顔は男性らしいかくばった形状でいて目に留まるのは勇ましいという言葉とは離れたパッチリとした目付き。

仕事は程ほどに大きな会社の事務。自身の故郷から大学進学のため上京しそのまま就職。妻帯者であり５歳になる娘もいる。

典型的でありながら大多数が充実感を感じるほぼ全てを保有している勲は、なぜか辺り一面が白という単色しかない、ともすれば吐き気をもよおし、発狂しかねる空間に一人立っていた。

立つというからには彼の身体を支える硬質な物体――すなわち地面もしくは床――が彼の靴底には在るはずだ。だがその感触がある場所さえ白という一色で塗りつぶされ、一歩でも足を踏み出してしまえば永遠ただ落下してゆくのではないかと錯覚させられるほどに単色だ。

勲は一人困惑する。この状況と目の前に発光体に。

この空間で意識を覚醒させた直後から辺りを見回し、自らの身体を叩くなどして異変がないか確認した彼は、ここが理解不能な空間であり、自身が普段どおり外出用の服装をしていると判断した。

空間への認識は一度とさえ視覚したこともない研究所のような意味不明な場所。自身の服装に関しては灰色のハイネックに群青色の幅に余裕のあるデニムのズボン。そうして黒の革靴を履いていた。

彼は今の場所と五体満足を確認し、理解不能ゆえの現状に対し否

定的な感情を頭痛として感じつつ、自身の視界に映る空間に次ぐ意味不明な物に意識を移した。

それは発光の状態だけをみれば、蛍のようだった。

暗闇の中で光るほのかな自然の光源。それを家族旅行で楽しめればどれほど癒しだっただろう。

しかし彼の１０メートルほど前方にいるのは暗闇の中で視認できる光源とは違い、この純白で埋め尽くされ暗闇の黒さの欠片もない場であるのにも関わらず、発光しているように認識できる彼の知識の中にはない何かだ。

それは先ほどから念波のようなものを利用し彼に語りかけてきていた。しかし勲は状況を整理することで手一杯だったため、それは独白になってしまっている。

その内容は彼に対する説明のようだった。

彼は状況判断後、ようやく冷静になり不信な発光体に顔を顰め、渋々耳を傾けたのでその説明を理解するほど十分な解説を聞くことはできていなかった。

「――というわけだ」

「……もう一度、初めから説明を要求する」

よもやこの発光体は地球人を攫った宇宙人なのではないか、というファンタジックな仮想を立てながら勲は警戒心を保ち、説明し終えたのか言葉を区切ったそれに言う。

そうすれば呆れたように、聞いていなかったのか。などという言葉が送られてきて、ビクリと見た目に似合わず小動物のように身体を震わせた。

念波のような声は口許の動きを追って身構えることができないためいつ発せられるかわからない。しかも空間から脳内に直接響くように聞こえてくるため緊張で精神を張り詰めさせている彼にとって

は酷く心臓に悪いものなのだ。
そんな彼の心境を理解していない発光体は再び説明を開始した。
「鈴木勲。君は一度死んだ」
「しんだ……死んだ？　まさか」
「嘘ではない。君は事実として死んだ。まぁそのときの記憶がないのだから信じがたいのも分からないでもない。だが君は死んだんだ」
名前を言い当て、そうして死んだと明言するそれに絶句する。一度目なら反論する余裕もあったが、二回も三回も死んだと断言されれば口も噤みたくなるものだ。
何せ行き成り異空間で覚醒したかと思えば発光体に自分が死亡したと断ぜられる。彼の体は存在しているのに、だ。
確かにこの空間は現実ではありえないかもしれない。確かに目の前の発光体は常識の中ではありえないものなのかもしれない。
だがそれだけだ。それだけの要因でそれは鈴木勲の死を彼に伝えてくるのだ。

発光体は浮遊している、という感覚も凍る空中に、白い背景に停止したままだ。
一度、彼はゴクリと唾を飲み込む。無意識に鋭くなる目付きと共に懐疑心が膨らむのをどうにか抑え、口を開く。
「なら、ここはどこだ。どうして俺はここにいる」
「そう焦るな。そうだな、ここは天国とても言っておこうか。難しく言えば世界と世界の間。何も存在せずあるはずもない隙間さ」
「……どうしてここに俺はいる？」
「ハハハッ、そんなに固くならなくてもいいじゃないか。
そうだね。ちょっとした手違いで、かな？」

天国？　世界と世界の隙間？　さすが意味不明物、いうことが違う。勲は緊張を紛らわすように目の前の発光体を必死に嘲笑う。

発光体の徐々に露になってゆく愉快そうな口調。

勲の尖り、隠しきれない警戒心を滲ませた言葉を笑い飛ばし、初めのほうは事務的な言葉遣いだったそれがだんだんと性格や心情を明かす。

発光体は顔も胴体も何もないというのに、声だけは感情豊かでどんな人物がすぐに読み取れる。発光体の人物――何者かは勲には仮想しかできないが――は、どうにもこの状況を楽しんでいるようだった。それは困惑し警戒する勲のせいなのか、それとも人物の“手違い”で作り出されたこの状況自体になのかは本人しか知らぬところだが。

手を伸ばしても届かないが、数歩歩けば捕らえる距離にいる手の平程度の小さなそれは変わらぬ調子で言葉を続ける。

「さすがに今回のミスは僕が悪かったからね。謝るよ」

「謝罪はこのさいどうでもいい。俺は生き返ることはできるのか、それはいつなんだ」

納得は到底できそうにないが、鈴木勲が死亡した。そしてここは天国や世界と世界の隙間とかいう場所なのだ。と仮定しなければ話は進まないと判断した彼はそのまま話の腰を折らずに問いを投げかける。

彼にしてみれば先ほどから理解の欠片もできない事柄をぺらぺらと語っている発光体。

実際問題、自身の危険を度外視しても詰め寄り一から十まで説明させたい焦燥感を彼はヒシヒシと感じているが、そんなことをしても一番確かめたい事柄に近づけないと冷静に思慮し――彼をそうさ

せてくれているのは皮肉なことにここに来てからずっと感じている悪寒なのだが――堪えているのだ。

発光体がいうには、その発光体である人物は全面的に自らの失敗・過失を認めるている。ならばこの事態は当然だが発光体が原因ということになる。

それについて彼は今はそれほど気に留めていない。後回しでいいほどだが、それならばこの空間に自分を閉じ込めたのが発光体である可能性、異なるのならその発光体が原因や意味などを承知しているのは明らかだ。

彼が懸念したのは自らの今後の安否だ。

彼は現状が夢などという、現実ではない可能性はとうに諦めていた。どこかに隔離されていると推測し、ならばこの空間から出られることはできるのか、それはすぐなのか、それともここで数時間閉じ込められなければならないのか。家族の元へ無事帰れるのか。それだけが彼が考慮していることだった。それを知るためならば、目の前の発光体とも口を利くことも仕方がないという姿勢であり、言うなればそれだけが彼にとっては警戒しか持てない発光体に対する、唯一会話をするに堪える必須の情報であり条件だった。

「無理だよ」

だが眼前の発光体は、それをいとも容易くふいにした。

挨拶でもするように自然に発せられた言葉は、勲の希望や想定をぶち壊すには十分だった。

「無理、とは……」

焦燥に身を焼いていたはずの彼から、全ての温度が消え失せる。

言葉の意味を理解することを拒絶する脳内は、思考が意味を割り出す前に耳を削ぎとり、地団太を踏んで暴れまわり会話の全てを忘れ去たいと慨嘆する。だが直接頭に割り込むように伝わってきた言葉が拒絶の意志を通り越して反芻され、感情が濁流として流れ出す。

同時に視界も聴覚も、ブレーカーが落ちた様に真っ暗闇になった。

発光体はそんな彼の様子や形容ならない能面のような表情にも気付いているのか気付いていないのか、まったく関心を寄せない。そして茫然とした彼の問いにもならない呟きに、子供のような無邪気さとそれゆえの無垢な辛辣さをもって跳ねるように言葉を返す。

「だから、無理なんだってば。ミスだったとしても死んだ人間を元の場所へ送り返すのは出来ない。残念ながらね」

「ど、どうして」

「どうしてもなにも、そういう決まりだし、やり方知らないし」

岩石にでもなったかのように動かぬ器官を、どうにか息を吸い込み声を発し動作させる。させなくては、彼が理解停止しているからこそ、いまだ儚く存在する凍った希望を存続させる手段はなくなる。確認するまでもなく潰えるのだ。

だがそうしても尚、ただ繰り出されるのは先ほどと一転して淡々とした、面倒臭そうな雰囲気の漂う念波の数々。それは、彼にとって凍結した希望を木っ端微塵に打ち砕く絶望の数と同数だった。

問うほどに地に落ちてゆく。最終的な“方法を知らない”という言葉に、彼は口を開くことをやめた。

止めて、ようやく理解する。

“これ”は発光体にすれば“決定事項”であり、それは即ち自身にも当てはまる“事実”なのだと。

自らが死んだという実感は今だない。天国へきたということへの納得もない。
だが、発光体が言うのならばそれは彼にとっては確定した事実となる。それは説明の限り発光体が勲をこの場に拉致し、そうして彼を帰す気がないことが裏付けている。
――ならば死亡という事柄の真偽に関わらず、天国という真偽に関わらず、彼はこの発光体に従うを得ない。それが、例えもう二度と彼がいつもの日常、失われるなどと考えることもなかった時間がなくなるという受け入れがたい事態になるとしても。

不規則に脈動するかのような錯覚を感じる左胸が、彼が感じ始めた感情の流動に併せ大きく動機する。爆発物のように危なげに脈打つ心臓の上に握りこぶしを当て、彼は自ら会話を再開させる。

「じゃあ、お前が俺を、元の場所に帰すのは、出来ないんだな」
「出来ないもなにも、する気もないしね」

立ちくらみが、視界が歪んだような感覚が彼を襲う。
軽い口調で叩きつけられた発光体の意志を反芻する、反芻される、――する気もない――？

「……」

ともすれば厳しいとも指摘される勲の顔は、それを唯一払拭させるはずの目元が細まることで般若のような顔に変貌する。青ざめ、冷たいほどだったはずの顔に業火が付けられたかのように灼熱が灯る。
一瞬にして爆発寸前の憤怒の表情となったその表情。だが、それは直に鎮火する。

彼は自らの表面に出した怒りに彼が元から持ち、長年で培ってきた冷静さで気付き、すぐさまそれを収めようと動いた。一瞬後に瞬きすれば、会話開始時の緊張感を持った神妙な表情に彼の顔は戻っていた。

「……」

表情筋を通常と変わらぬものに直した勲は、そのまま黙り込んだ。そして心拍数を拳の叩く回数に合わせるように、ゆっくりと叩き始めた。

それは暴れ回る心臓をどうにか落ち着かせることを意識した行動だった。顔は落ち着いたとて、彼の臓器は感情に流されるままだ。そこまで一瞬にして正常値に戻せるほど、彼は完璧ではない。

だが、それは気付かれてはならない。気付かせてはならない。怒りを悲しみを苦しみを悟らせてはならない。

彼には希望が潰えたこの一瞬で、“それ”をしなければならないような目的ができた。

それまで一切勲の声以外に反応してこなかったそれも、彼の沈黙の長さに違和感を感じたのか、意味ありげな含み笑いをして勲に念波を送る。

「驚いちゃった？　でも安心してよ。君はまた生きられる」

「……」

「勲くん。君は好きな力を持って異なる世界へ旅立つんだ」

子供が自慢をするように、研究者が論文を発表するように仰々しく発光体は彼の決定した今後を宣言した。

彼が沈黙しているのを聞き入っていると判断し、本当の彼の心境

など検討もつかずにそれを言い終えた。

このような展開に、彼は覚えがあった。今から何十年も前に携帯やパソコン上で暇な時間を過ごすときや、現実逃避で想像や都合のいい妄想に浸りたかったときに読んでいた小説。その中でも二次創作というジャンルで、よくある展開として使用されていたはずだった。

そうしてそのような“お約束”のお話が目の前に繰り広げられているのだと確信する。その発光体は彼自身がそれを知っていることを前提として話している節と、それを歓喜し歓迎すると信じきっている節、見事に話に合致する。

その一連の流れが小説の中でもなく夢でもなく、自身に起こっている現実としてそれを受け入れた彼は、“日常へ帰れない”と結論付けたときから頭に浮かんでいた妻と子の顔をかき消した。

この場で思考すべきはそれではない。目の前の発光体は好きな力を、と大盤振る舞いをした。ならば、その能力について考えるべきなのだ。

「……なんでもいいのか？」

「いいよ。でも、一つだけ」

「なら、ヘルシングという漫画の、アーカードという主人公の身体を貰い受けたい」

「ＨＥＬＬＳＩＮＧのアーカードの身体……なるほど、またおもしろいね」

発光体が感想を述べたときには、彼の身体は変化していた。

体は痩躯長躯。視界は高く、髪は重そうな長髪になりその分の重量を頭部を支える首に感じ、服装は彼が指定した漫画主役の定番服といえる目が痛くなるような真っ赤なコート。ズボンはデニム生地

のようだが黒一色で足を締め付けるように密着しており、底の高いブーツはズボンと同じ黒で固められている。
様変わりした自身の姿を自覚した彼は、このキャラクターを記憶していた自分に感謝した。力、などといわれても、仕事に追われ家族サービスに追われる一般人が早々すぐに思いつくものではない。だが現在でも自室にある娘には見せられない血飛沫の舞う漫画を、力という単語から手繰り寄せて思い出せたのだ。
一つだけ、ということで少々不安ではあるが、これで自分には十分だと暗示するように彼は自身に言い聞かせる。

そのまま、動作確認などはせずにただ胸に新たに手袋が嵌まった拳をあて続けた。
冷静さを完全に取り戻したのか、心臓の拍動は通常に戻り、遅い速度を叩くことはなくなった。だがその拳は、今までの身体から突然変化した身体の肉体への調節に間に合わず、手袋から爪が突き抜け肉をも抉るほどに握り締められていた。
身体全てを総とっかえした彼は、厳しくはっきりとした目が特徴的だった顔から、白い肌に中性的なほどに整った顔に様変わりした。

彼はそれを無表情にして、一歩、足を踏み出す。
そこは白一面の、間違えれば落下しそうな錯覚を覚える足場。しかし彼はそれを物ともせずにただ無感情に一歩また一歩と進んだ。進むことが出来た。
彼は握り締め血が流れ出す手をそのままに。ただひたすらに前へ歩を進めてゆく。

「あれ、どうしたの？　勲くん」
「いや……こんな素敵なプレゼントをしてくれた本人に会いたいと思ってな。
これがお前自身なのか？」

発光体との距離を完全になくし、３０センチほどの距離になったときそう互いに言葉を伝え合う。発光体は変わらず、勲は淡々とした、元のものとは違う声色で。

どうやら発光体は言葉を発するだけでなく、相手との距離なども感知できるように設計されているらしい。彼はそう判断すると、微笑みもせず発光体からの返答を待つ。

幾分か背の高くなった彼はその発光体を見下すほどの身長を手に入れ、実際に上から除き見るように発光体に視線を向けていた。

彼の顔は、長すぎる長髪に隠され、幸か不幸か血に拳が赤く濡れ、腕にまで伝い出した異様な光景も黒髪が覆っている。

発光体は近くなった距離に特に文句も言うことなく、気分を向上させたままの口調で彼に語りかける。

発光体は、距離を感知しても、血の臭いは嗅ぎ取れはしないようだった。

「まぁね。とりあえず君の概念から“神”っていう概念で作り上げてるんだけど」

「なら、お前は神なのか？」

「一般的にはそう呼ばれるかもねぇ」

――彼にはそれで十分だった。

神というのは、無信教である彼にとっては関心のないことだった。ある意味でその問いは時間稼ぎであり、必要な情報は、その“発光体”が言葉を発している人物の“本体”だという証明だった。

なるほど確かに神ならば、彼にとってはそこにあるだけでいい。

特に人の形をしていなくなって、目も鼻も口もなくったって、超常現象的なそれがあれば神らしいし、嗅覚などなくとも関係がない。だがさえも意味がない。ただそれは彼にとって都合がいい事柄だっただけだ。

彼はその神と名乗るやからに問いかけて、違うというのなら姿を現すように願い出ていた。どうしても、彼はその本人を目の前にしたかった。神に出会い、神に接触し、干渉できるようにならなくてはならなかった。

そうして、その発光体が神本体であり、上記の事柄ができる状況だと――彼の知識ではなく、彼の身体が本能的に囁き――分かったならば。

胸の位置で握り締めていた赤い拳を開き、伸ばし。むんず、とその発光体を手袋に覆われ、本来の手とは違う細い指で掴み取る。少々大きくなった手の平がそれを覆い尽くすことは容易だった。

ここまでくれば何らかの反応をしなければおかしいはずの発光体。だが、彼の身体はそれが行動の異様さを己の身体に関わることだと気付き、反応する前に行動をとることは簡単だった。

包み込んだ手に痛みやむず痒さはない。だがビクリと動いたような感触を伝えた皮膚に、“ああ生きているのだ”と安堵する。

生きていないと意味がないのだ。彼が今からする行為は、この発光体が確かな命を持っていないことには成立し得ない。

だから彼は安堵する。自分をこんな目に合わせた――もう日常には戻れずに、愛した人たちにはもう逢うことはできずに、血の繋がった可愛い盛りの自分の命にかけても守りたい娘の成長を見守れない。何よりそれら全ての鈴木勲という未来を奪われた――原因となった、童子のような純粋さを持つそれが生体として存在する事実に

途方もない喜びが湧き上がった。

白い空間で唯一の黒と赤が、手にした獲物を逃がさぬよう壊さぬよう全力の握力で握り締める。伸ばしていたその手を折り曲げて、発光体を手に収めた拳をそのまま口元へ手繰り寄せ。

――望みを果たすように、人であったことを捨てるように、慈悲もなく容赦もなく、彼は“捕食”した。

「ぎゃあああああああァァァァァァァァァッッ！！！」

頭部を鈍器で殴りつけるような悲鳴とも奇声ともつかない絶叫がこの空間全土に響く。

アーカードという吸血鬼である身体の犬歯で抉られた発光体は、彼に口腔から確かな柔らかさを彼に伝え、共に塞ぎようのない傷を負った。

抉られた傷口からは人間の血液と同じ赤い色が勢いよく噴出し、鋭い歯で貫くその口と上半身に全てをぶちまけるように降り注ぐ。口元に溢れる血液のようなそれを、抵抗もなく飲み下しながら、彼は神でも血は出るのか、赤いのかと思考する。

その顔は薄く、柔らかく、慈悲を与える聖母のように微笑んでいる。

「いだ、あぁぁあっ、あぁあ、ああああああああ！！！！」

脳髄から破壊するかのように鳴り響く痛覚の叫びを遮断しているかのように、一心不乱に尽きることがないと思わせるほど噴出するそれを、彼は吸い込んでゆく。

飛び散る赤は、びちゃびちゃと水滴のように撒き散らされ純白の

地面に印をつける。純白だけだった神聖なはずの場所は、無遠慮に臆面もなく汚染される。もはやそこは白いだけの空間ではなく、赤い絵の具を撒き散らしたキャンパスだった。
節操もなく飛散する目も覚める赤色により、清らかだったのかもしれない空間は狂気に染まる。

「ぎえ、るぁあああああ、いぃぁあああぁあああああっっ」

パンッと風船が割れる音がして、同時に彼の拳にあった発光体の肌触りも消える。
それは神と名乗った存在が消滅したことを、その魂が飲み込んだ血に似た液体により彼自身に取り込まれたことを意味していた。
それは、彼が授かったアーカードという吸血鬼の特性ゆえの授けられた能力だった。

彼は感慨もなさそうに血に濡れて、発光体だったそれの原型もなく吹き飛んでしまい、形成いたものの欠片もない己の血以外の赤で染まった手の平を見つめて、呟いた。

「雪、由」

それは鈴木勲という男の妻と子供の名前だった。悲しげに、血に塗れた狂気の姿のまま、寂しさと愛情に溢れた声色で、二人の名を呟いた。

彼は幸せだった。自分の今の生活に満足していた。
そして仕事の中で本音を隠し、怒りを抑えることを学んでいた。
人より冷静な判断や行動をできると自負していた。
彼は普通の思想の持ち主だった。自分の許せないことをされたら苛立ちもするし、悲しみ苦しみ、そうしてそれがどうしようもなく

許容できないことであり、それをぶつける相手さえいれば復讐をしようと考える発想も有していた。

だから実行した。それだけだった。

在り得ぬ事態に陥り、それをミスをしたといい責任を問い詰められるものがあり、そのミスが彼にとって許せぬことであり、復讐できる力を手に入れたなら。

――誰でもたどり着く当然の結果だった。

「……俺という魂の牢獄で、俺が死ぬまで悔いていろ」

死んだならいい。本当に意識を闇に葬り去って、思考を停止させ、何も考えられなくなったのなら解放してもいい。

だが、彼は自身の思考がいつまでも続くまで神という対象を許すことはありえなかった。

家族の名を呟いたときとは打って変わり、呪詛を吐くような――実際そうなのだろう――呻く声でそう宣告した彼は、つい、と視線を赤が広がる前方に転じる。

すると突如、この白と赤、そして彼だけの空間に黒い穴が開通する。

地面と思われる場所、そして彼の一歩手前に出来たその穴は彼が今さっき手に入れた知識で彼が表したもの。発光体が述べていた異世界への入り口であった。

発光体を血液のようなものを介し取り込んだ彼はそれの知識を持ち、その力を掌握するに至っていた。初めにしたことは、その知識と力を理解し、自分の元の世界に、元の姿に戻る事ができるかということだった。

そうして熟慮した結果、彼は確かに元の自分姿、居場所に戻れないと確信し、断腸の思いだったが納得もした。
ならば行く所は一つしかない。発光体のもともとの思案の通りになってしまうが、この空間にいつまでもいるという選択肢は彼にはなかった。

復讐は済ませた。元へ帰る手段も、何もない。
ならば何もしないよりも何かをしていたほうが気が紛れるだろうという、諦観での結論だった。
何もない。感情も思考もどこかへ置いてきたかのような彼は、誰もいない空間で、自分でなくなった身体で、赤に染まった身体で言葉を紡ぐ。

「世界を見て回ろう、きっといつか、何かの目標でもなんでも、見つかるはずだ」

諦めを包容した願いを呟きつつ、彼はその穴に自ら落ちていく。
希望も憎悪もなくした彼は、ただ何かを求め筋道どおりに異世界への扉を開いていった。

序章（後書き）

副題を【突然拉致られて力を貰ったので拉致った（自称）神の発光体をブチ殺して異世界へ人生の意味を見つけに旅立ってくる】にしようかと思ったが、ネタバレも過ぎると考え自重しますた。

第一幕（前書き）

世界創造とか書いておりますが、特定の宗教や神話に対する批判ではありません。あくまで一個人が趣味として書いているフィクションです。

第一幕

彼の辿り付いた先は自分の姿以外視認することができない真っ暗闇だった。

暗闇というより、ただ黒。白一色だった空間から、次は黒一色の世界へきてしまったようだ。

だが、それもそうだ。なぜなら“そこ”は“何もない”のだから。

「本当に（自称）神は俺が異世界に行く直前に、世界を創造しようとしてたのか」

誰に言うわけでもなく呟く言葉の内容は、彼が血のような液体を媒介に取り込んだ神らしいアレが思考し想定していた事柄だ。

黒一面の世界で唯一人存在し、光も存在しない空間で輪郭からはっきり確認できる彼は、一人、人体の形を保ち行くあてもなく歩き始める。

神（笑）の中身は、とても単純だった。

彼がそれを取り込んで思ったことは、こいつはただ子供だったのか、ということだった。それの中身は酷く単純で、幼子そのままだった。

おそらく、アレは生まれたばかりだったのだろう。いや、発生したばかりとでも言うのだろうか。自分がこうして取り込めたのだから生きてはいたのだろうが、それは母というものから生まれたものではなかっただろう。過程はどうあれ、どこかから発生し、そうして世界を制作しようとしていたのだろう。

だが、発生したばかりのアレは、知識や力は所持しているものの、それを使用し考える頭が足りなかったのだ。

だからこそ、それは安易に他の世界から一人の人間を呼び寄せた。

正確には身体はあれど魂だったらしい。いつの間にか肉体と別離させられていた。彼の記憶にはもちろんそんな処置に関する覚えは一切ないが。

そうして魂を呼び寄せたそれは、自分の世界でも堪えうるような力を渡して、送り込もうとした。

実際にはそこで手違いが起きたわけだが、その生命体はこう考えていたらしい――送り込む直前に世界をすぐに作ってしまえば大丈夫――つまり、七日間さえも使用せずに自らの世界を創造しようとしていたらしい。

どれだけ単純なのだという話ではあるが、それは神であったらしい発光体にとっては些細なことだった。

なぜならそれは、目の前の玩具（俺）に夢中だったのだから。

結局、“彼”は子供だったのだ。取り込んで分かる。生まれたばかりのそれは人間の子供と同じだ。ただ知識があり力があっただけの、幼児。

思慮が足りず、行動が早く、無邪気で無垢で愛らしく――その分残酷、残虐。世界は自らを中心に廻り、不特定多数は彼にとってすればただの玩具。

その彼にとってすれば、神のような特性上、本当にそのとおりだったのだから責められもしないのかもしれない。子供の過ちを保護者が背負うのと同じだ。だが現在、あてもなく黒い世界をふらつく“彼”にとってはそういうわけにはいかなかった。

鈴木勲には、幼かった子供の過ちと理解できたとしても、科せられた所業は何事もなく容認するには、子供がした過ちは大きすぎる罪だった。

――俺は異世界に行きたかったわけじゃない。強力な力を振るって屈服させたり、可愛らしい女性と結ばれたかったわけでもない。

全て在った。欲しいものは全部。

「ああ、チクショウ！　もういい。もう戻れないんだから、いつまでもクヨクヨしてたって意味がないんだ」

激しく頭を左右に振る。後悔や沈痛で埋め尽くされた思考を振り払うためだったが、顔にばしばしと嫌に長くなった重量感のある髪が当たり少し顔を歪める。

彼は思考に耽って忘れていたが、今の彼の姿は日本人の冴えない三十路男性ではなく、漫画に出てくる現実ではありえないようなキャラクターなのだ。

髪の感触でようやく思い出した彼は、自分の顔の横にぶら下がる――ように本人には見える――鴉の濡れ羽色のそれを一房掴んで。

「そういえば姿形って変えられるんだよな、吸血鬼って」

できるだけ早々にこの姿から変化させることを決意した。

興味なさそうに髪を手放し視線を外した彼は、足を動かすことを止めて、どこだか分からない空間に立ち止まる。

つまらなそうに辺りを見回して、本当に何もないことを確認する。

ここで“何か”あればそれをずっと観察しているんだが……。そんなことを一人考えて、そんな仮想はどうでもいいと切り捨てた。

「……そうだな。それに、“あれ”がいつまでも自分の中にあるなんて許容できるもんじゃないしな」

それに、独り言もそろそろ寂しくなってきたし。

誤魔化すようにそう内心ごちて、彼は自分の手を胸の前に引き寄せる。

手袋をしたそれは、爪の部分と手の平の中心部分が指の分だけ不

恰好に破れている。それはそうだ。彼はその爪で手の平を抉ったのだから。
だが彼の手には既にその血はついていなかった。その傷も、そうして自らを呼んだ生命体を吸血したときに噴出した赤さえも。
思えば彼の身体には、もうどこにも赤い液体はこびり付いていなかった。このときには、もう彼がアレを殺したという事実はその敗れた手袋にしかなかったのだ。

その手の持ち主は、手の平を見つめたかと思うと――その手の指を密着させ、鋭利に尖らせ凶器のようにしたそれを、自らの胴体―丁度肋骨と肋骨の間、胸の位置に埋め込んだ。

それは、傍からみれば自傷行為にも見えない――自殺にさえも見えない、異様な光景だっただろう。

そして彼に襲うのは、人体に正しき苦痛。
皮を切り裂き、肉に凶器が突き刺さり、内臓に侵食してゆく異物感。
強力な磁気に引っ張られたかのように引きつり歪む、整っているはずの顔と激痛に折り曲げられる体。
それに耐え、さらに奥まで突き刺し、そうしてその手を“何か”を掴むために開き広げる。

「あ、ぁ、ぐぅがぁあああああッ――」

意識が吹っ飛ぶほどの痛みに耐え切り――彼は自分の身体の中から、淡く白色に光る手に丁度収まるぐらい、林檎ほどの丸い物体を取り出していた。

「あああああ！　ほんっっといってぇ！！　有り得ん、意味分から

んッ！　すぐ治るくせに痛み感じるってなんなんだよ！　……要改良だな」

一通り痛みに関しての文句を叫び、最後に疲れたようにため息一つ。

実際、精神的に彼はかなり疲労した。いくら知識として痛みがある、すぐ治癒すると知っていたとしても、これは痛い。もうどう痛いかというと胸に包丁が突き刺さってそれをぐりぐりと捻ったぐらい痛い。というか普通そこまでされる前にショック死か何かで死んでいる。

彼の今後は、成ったばかりの身体を時間をかけてもいいから、楽な魂の取り出し方や能力についてを研究するという方針に固まった。

それはそうと、彼が言葉に表せないほどの痛みを伴い取り出したのは、先ほど取り込んだはずの“彼”である。

既に勲自身に吸収され、同調し同化したはずのその命だが、どうやら“力”的には浸食されずに純潔を保っているようだ。

――説明すると、今の彼の身体。ＨＥＬＬＳＩＮＧのアーカードの肉体である彼だが、それはチートとかいう言葉が似合う吸血鬼の身体だ。漫画のストーリー上ではなんど身体を吹っ飛ばされても立ち上がり、敵を木っ端微塵というか情け容赦もなくフルぼっこにして吸血するラスボス――のような主人公として描かれている。

そうして、その身体に成った元三十路男性はというと、残念ながらその特性をそのまま受け継いだわけではない。

吸血鬼が何度殺されたとしても蘇るのは、その吸った血の量が原因である。魂の対価である血を飲んだ量（人数）が多ければ多いほ

ど、その分の魂を所有することになる。それは魂の同化、血を吸い寿命を命を奪うわけではなく同化させる術。

それは一方的な略奪だが、自分の体内（領土）にその魂を住まわせることと似ている。吸血された側にすれば自覚はないだろうが、血を与えるということは自らの意志や思考、力や技術を分け与え、吸血鬼の体内に自分をつくることと同意なのだ。

だからこそ彼は、自ら捕食した生命体の知恵や力を得ることができているし、思考などが読めるのだ。

だが吸血鬼にとってマイナスがないということでもない。

少なくとも勲にとってはあまり認めたくはないことはあった。

この吸血鬼の身体は、血を魂の代価として自らの魂に同化させる。

それは、とても危険なことではないか？

自らの魂に、他のものが入ってくるのである。他人の思考や概念、世界観、記憶や技術その全てが自らのものになる。

そうなれば――自分は自分という人格を留めておくことができるのだろうか――？

今こうして魂を取り出した彼は、確かに自分の事を鈴木勲だと断言できると確信している。

取り込みはしたものの、それの力が自らのものになり、思考や考えが理解できただけ――そう彼は吸血した上で仮想していた。だが本当にそうなのか。

本当に影響されていないか、人格に変化があるのではないか……

さて疑問は尽きることはない。

因みに彼の肉体は身体だけが吸血鬼という注文ゆえに自分の魂、血液しかないような新品同様の状態なので残念ながら疑問に対する推理材料さえもない。

それがある意味で最強となった彼にとっての懸念だった。

――話は盛大に逸れたが、取り出した魂は一度彼と同化しているにも関わらず、その白さは失われていなかった。ただ少し発光が弱まった程度か。

しかし彼と同化したのは事実であり、その証拠に目の前の物体には自由意志がない。彼が許せばそれを取り戻すかもしれないが、そんなことをするつもりもなかった。

苦労して取り出したそれを頭を駆け巡った懸念と共に見つめて、どうせ答えは出ないのだと放棄した。

気を取り直し、林檎大のそれにギュッと握力を加える。

力加減に注意しつつ、五本の指で器用に前と後ろから押してゆく。

少しすると、それは丁度半分にゆっくりとずれ始め、最終的には真っ二つに割れた。

「こんなでいいか」

綺麗に半分になったそれに頷きつつ、彼はその一方を手に取る。

丸だったそれが円を断面にするドーム上になったこと――即ち魂が分断されたこと――に対し何の感慨も示さずに、彼はそれを持ったまま腕を高く持ち上げる。

そうして、そのまま引き絞るように腕を頭より後ろに引いてゆった。

そして、体制も足幅を適度に開き、片足を上げ、完全体になった彼は大きく息を吸って――

「そりゃぁぁあああ！！」

高く遠く――投球した。

第一幕（後書き）

ピッチャー投げたぁあああああ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0116ba/

自分探しの旅

2012年1月2日00時47分発行